【296】

氏　名（本籍）	石　橋　喜美子（長 野 県） いし　ばし　きみこ
学 位 の 種 類	博　　士（学　　術）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2042　号
学位授与年月日	平成 16 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	生命環境科学研究科
学 位 論 文 題 目	**家計における食料消費構造の解明** －年齢階層別および世帯類型別アプローチによる－

主　査	筑波大学教授	農学博士	永　木　正　和
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	徳　永　澄　憲
副　査	筑波大学教授	農学博士	横　尾　政　雄
副　査	筑波大学助教授	博士（農学）	納　口　るり子
副　査	筑波大学助教授	博士（農学）	茂　野　隆　一

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は，二つの視点から食料消費構造を解明した。ひとつは重回帰分析手法を用いて，個々人の年齢による食料消費実態を解明した。第二は，独自に考案した世帯類型化法に基づいた世帯類型別の消費構造の解明である。

20 年間の「家計調査」個票データを利用することで（年間延べ数 9 万 6 千世帯），年齢構成や世帯構成に関する情報を取り込んだ食料消費分析を行った。

生鮮野菜では，品目ごとに年齢階層別消費傾向の異なることを明らかにした。健康志向による緑黄色野菜の消費量増加は高齢層での増加によるものであり，若齢層では多くの品目で顕著に消費量が減少していた。すなわち，高齢者層での野菜消費量の増加よりも，若い世代での減少が大きく，全体としての野菜の消費量は減少していることを示した。

生鮮肉の分析では，従来は成人の消費量の方が多かった牛肉が，成長期の子供の食材として多用されるようになり，食品としての性格が贅沢品から子供のタンパク源へと変化したこと，牛肉輸入自由化後に年齢階層間で牛肉の購入単価（品質を反映した単価）における格差の拡大，地域による消費量・価格の変化，等を明らかにした。

米については，世帯類型別・年間収入階層別に消費量，購入単価の経年変化を分析し，所得の多寡よりも年齢や世帯要因の方が消費に大きく影響していることを明らかにした。従来，需要分析のよりどころとしてきた所得や価格要因だけでは米の需要量変化を正確に把握できないことが示唆された。

以上，米の分析で最も明白になったが，本研究は，食料消費動向の分析に年齢要因と世帯構成要因を考慮するアプローチの重要性と，それによる新しいファインデングを示すことができた。とりわけ，若い世代の需要動向を重視しなければ正確な需要動向把握，将来予測ができないことを示唆した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は，核家族化，少子化，主婦の勤務が一般化した1980年代以降のわが国の主要な食料品目の消費の構造変化を，膨大な家計調査個表データを駆使して計量的・実証的に解明した。その際，これまで多くの食料消費研究者によって指摘されてはいたが，データ的な制約のために本格的な実証研究のなされてこなかった消費者の年齢や世帯構成要因の，食料消費構造への影響を明らかにした。本研究は，この点に大きな意義があり，高く評価できるところである。日本の農業政策の中心である主食の米については，消費者の年齢や世帯構成要因が所得要因，価格要因以上に消費量に強く影響していたこと，年齢による品質選好の有意な差が検出されたこと等に重要なファインデングがあった。世帯構成や年齢構成が大きく変化している今日，食料消費の研究に方法論としても，またその結果が提供する情報観点からも有意義で，今後の研究方法に新しいアプローチを開いたことを高く評価できる。本論文は，研究構想力，分析手法，研究成果のいずれにおいても博士の学位を与えるに相応しい高い学術水準に達している。

よって，著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。